

大妻コタカと戦争

Otsuma Kotaka and war

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 井上 俊也³
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², and Toshiya Inoue³

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所
²一般財団法人大妻コタカ記念会, ³大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：大妻コタカ, 生活改善運動, 銃後の守り

Key words : Kotaka Otsuma, Lifestyle Improvement Movement, Guard the home front

1. 研究目的

戦後 70 年の節目となる平成 27 年, 日本国内では戦時下をふり返る機運が高まり, メディアだけでなく各大学においても戦中戦後の大学を巡る資料や証言を収集するプロジェクトが立ち上げられた。

大学での戦争体験の継承という社会的課題の再確認が始められ, 改めて教育(大学)と戦争の関わりを考える機会となった。しかし, 女子の大学ではこの課題に対し積極的に向き合うところは少なかった。

江戸封建時代, 女は文盲たれと女性は教育を受けることができなかった。しかし, 明治時代になると富国強兵策の一環として女子も教育をと教育を受けることができるようになっていく。

すなわち, 戦争が女子教育を推進した歴史がある。

江戸封建時代から続く家族制度の下では, 女子の性別役割観や女子に対する良妻賢母教育の理念が確立していたが, 十五年戦争時には戦争の長期化により男子労働力が枯渇し, 労働力不足により女子の社会進出が進むことになった。

さらに, 銃後の守りという言葉に象徴されるように女性は男性の戦闘員を支える役割を果たし, 婦人団体は女性が家庭の外での活躍を可能にした女性解放の一面がある。

伝統的な良妻賢母主義の考えの中で, 女性の社会進出, 女性解放を戦争はもたらした。

女子教育と戦争, 大妻コタカと戦争について歴史的事実, 史資料調査をし, 「教育と戦争」の関わりを検討することは, 大妻コタカの精神を継承し具現することであり, 大学での戦争体験の継承と

いう社会的課題に応じることへの必要があると考える。

大妻学院においては戦前戦後を含む大妻コタカの活動について史資料は残されているが, 大妻コタカが戦時下においてどのような役割を果たしたかという観点からは分析されていない。

本研究は, 大妻学院が収集した史資料以外に雑誌・書籍などのメディア媒体, その他聞き取り調査などによる史資料調査整理を行い, 戦時下において大妻コタカがどのような役割を果たしたのかを検証することを目的とする。

2. 研究実施内容

本調査は, 昭和 12 年 7 月の日中戦争開戦時から昭和 20 年 8 月の終戦までの期間を対象とし, 文献調査, 聞き取り調査を行った。

また, 大妻コタカが教育者として取り組んできたこと, 戦時下における大妻コタカの位置づけ, この 2 点を明らかにするためのフレームワークを構築し, 戦時下の大妻コタカの活動を分析した。

2.1. 文献調査

2.1.1. 浄土真宗本願寺派総合研究所(京都市下京区堺町 92) に対し, 令和 4 年 9 月, 戦時中に西本願寺の依頼で大妻コタカが講演をした資料調査を文書調査として実施。

2.1.2. 慶應義塾史展示館(東京都港区三田 2-15-45) において, 学徒出陣の展示調査を令和 4 年 8 月 8 日に実施。

2.1.3. 九州歴史資料館(福岡県小郡市三沢 5208-8) において, 当資料館所蔵の大妻コタカに係る資料調査を令和 4 年 10 月 16 日に実施。

2.1.4.株式会社白洋舎 五十嵐健治記念洗濯資料館(東京都大田区下丸子 2-11-8)に、令和5年2月、大妻コタカと白洋舎化学研究所の関係について、資料調査をデジタル文書調査として実施。

2.1.5.大成龍神社(広島県世羅郡世羅町川尻 890)において、戦後奉納した燭台調査を令和4年9月28日に実施。

2.1.6.国立国会図書館(東京都千代田区永田町 1-10-1)において、資料調査を令和4年7月11日、7月12日、8月15日、8月22日、9月26日、12月7日の6回実施。

2.1.7.昭和館図書館(東京都千代田区九段南 1-6-1)において、資料調査を令和4年8月9日、8月10日、8月12日、8月16日、8月17日、8月18日、8月19日、9月21日の8回実施。

2.2. 聞き取り調査

戦時中および戦後の大妻学院において、大妻コタカを支えた卒業生と戦後直後の大妻女子大学の学生生活に関する聞き取り調査を以下にて実施。

2.3.1.九州歴史資料館(福岡県小郡市三沢 5208-8)において、令和4年10月16日に卒業生への聞き取り調査。

2.3.2.山梨県甲州市において、令和4年11月24日に卒業生への聞き取り調査。

2.3.2.安芸高田市生涯学習センター(広島県安芸高田市向原町坂 333)において、令和4年12月11日に卒業生の親戚からの聞き取り調査。

2.3. 調査分析のフレームワーク

大妻コタカの戦時下の活動について、教育者である大妻コタカが何に取り組んでいたのか、そして戦時下において大妻コタカがどのような枠組みでその活動を展開したか、という点から調査分析を進めた。

「女子」に対して「良妻賢母」教育を行った大妻コタカであるが、「社会」に対しては大正時代から「生活改善運動」に取り組み、大きな影響力を持つ存在であった。そして戦時下においては、戦時体制を支えるために「新体制運動下の婦人団体」が設立され、大妻コタカはその団体の要職に就き、「生活改善運動」を推進した。本研究では「生活改善運動」と「新体制運動下の婦人団体」を調査分析のフレームワークとして、戦時下の大妻コタカの活動を調査するとともに、その時代背景などについても調査を進めた。

3. まとめと今後の課題

まとめ

戦時下において、大妻コタカがどのような役割を果たしたかを検証する中で、明治から大正への移行時に日本の近代化を推し進めるために政策的・啓蒙的な運動として早急に展開された「生活改善運動」が、大妻コタカの戦時下の活動の要点であることがわかった。

「生活改善運動」は、家政を担うべく婦人が国民の生活改善の中心的役割を果たすとされ、女子には学問はいらないとされていた時代で、女子への「良妻賢母教育」が必要とされる基因となっていたのである。

そして、「良妻賢母」という考え方に基づくこの大正期の生活改善運動は、戦時下においては「銃後の守り」へとつながり、婦人団体としての活動となるのである。

この一連の「生活改善運動」の中で大きな役割を果たしていたのが大妻コタカである。大妻コタカは教育者として講演会に呼ばれ、基本的な科学知識を用い実演を交えて講演をし、分かりやすいと世間の認めるところとなっていく。

そして、翼賛体制ではオピニオンリーダーとして登用され、各団体からの依頼で多数の講演会を実施し、「銃後の守り」の中で変わらず良妻賢母教育、生活改善運動を真摯に実践したのである。

また、テレビやインターネットのない時代の女性の情報源は「婦人雑誌」で、多数刊行された婦人雑誌の中でも一般大衆向けの婦人雑誌は、学校を出た後の女性教養の基盤、良妻賢母教育の場としての役割をもっていたとされる。

大妻コタカは婦人雑誌創成期から執筆を依頼され、新しい生活の技術と知識を実用に役立つ形で執筆し、啓蒙活動をおこなったのである。

戦時下において男性と同等の仕事につく女性の社会進出を評価した大妻コタカは、戦時体制にいち早く舵を切った婦人雑誌の依頼に応じて、種々工夫し研究の上で改良服、代用品など多数執筆し、戦時下の家政を担う婦人の修養に大きな役割を果たしたのである。

大妻コタカは戦争以前から質素儉約に徹し、廃物を生かす精神のもと裁縫教育を実践していた。また、科学的知識を基に、研究・勉強を積み重ねたアイデアを生活の中で実行していくことが高く評価された。コタカの考えである質素儉約・廃物利用を生かす実用的な精神が、戦時統制の時代に取

り入れられた形であったといえる。

今後の課題

1年間という限られた期間の中での調査・研究であり、なお解明すべき事項も多く、今後の調査・研究が必要である。

4. 主な参考文献

『婦人倶楽部』大日本雄弁会講談社、『婦女界』
婦女界社、『主婦之友』主婦の友社、『家の光』産
業組合中央会、『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、
『少女倶楽部』大日本雄弁会講談社、『キング』大
日本雄弁会講談社、『みさを』陸海軍将校婦人会、
弘道会、『婦人と修養』婦女界社、『週刊朝日』朝
日新聞社、『帝国教育』帝国教育界、『女性教養』
實業之日本社、『愛国婦人』愛国婦人会東京部、

『日本母性』財団法人日本女子会館、『商店街』誠
文堂新光社、『女子青年』大日本連合女子青年団、
『週刊婦女新聞』東京：婦女新聞社、『婦人講座
72』社会教育協会、『放送』日本放送協会、『常会』
財団法人中央教化団体総合会、ほか

5. この助成による発表論文等

今後研究成果がまとまり次第、発表・投稿予定
である。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研
究助成（K2208）「大妻コタカと戦争」を受けたも
のです。